

# 支那の古文獻に現はるゝ麒麟について

出 石 誠 彦

- 一 從來の諸説の紹介
- 二 仁獸、瑞獸としての麒麟
- 三 麒麟の形態
- 四 麒麟の由來に關する諸説の批判
- 五 麒麟の由來に對する鄙見

## 一、從來の諸説の紹介

支那上代の文獻に、往々麟又は麒麟といふ靈獸が現はれてゐることは、人のよく知るところであるが、私の寡聞なる猶ほ未だその由來が如何なるものであるかに就いて考究した結果の學界に提示

支那の古文獻に現はるゝ麒麟について (出石誠彦)

されたものあるを聞かないから、茲に未熟ながら聊か鄙見を陳して識者の是正を仰ぎたいと思ふ。今、その鄙見を開陳するに先立つて、一應麟に就いて從來如何なる説が存したかを顧みて置くことは、考察を進めるに便するところ尠くないと考へるから、最初にそれら諸家の見解を簡単に述べることとする。

想ふに、從來の諸説の要旨は、これを(一)麒麟を Giraffe とする説と、(二)それとは異つた説明を試みる説との二種に大別することが出来よう。第一の説に就いては既に LAUFER 氏も指摘せられた如く、<sup>(1)</sup> BRETSCHNEIDER 氏が嘗て麒麟と Unicorn とは何等かの關係あるものではあるまいかと顧慮しつつ、然もなほ、十五世紀に入り支那使節が西方亞細亞より Giraffe を購ひ歸つた事例を記し、後世の所謂麒麟は Giraffe なるを説かれ、<sup>(2)</sup> ついで、H. KOBH 氏は天方至聖實錄年譜の回教的西方諸國の記事の中に麒麟則ち Giraffe と思爲せられる記述があり、麒麟の字音と Giraffe に對する亞刺比亞名及び埃及名とは類似して居るといふことを述べられた。<sup>(3)</sup> 更に DE GROOT 氏は説文、淮南子など種々の文獻を引いて麒麟の Giraffe なるを主張し、支那の地、上古には Giraffe を産したのではあるまいかと論じてゐる。<sup>(4)</sup> 又た近く章鴻釗氏三靈解なる書を著し、その麒麟解に於いて或は字音の相似を論じ、或は形態上の記述につき考檢を試みてゐるが、要は麒麟は Giraffe であるとの臆測を試みたのである。<sup>(5)</sup> 而して、こゝに述べ來つた關係を斷定的に説いたのは A. FORKE 氏で、

氏は諸種の古文獻を引き「想ふに支那人が穆王の旅に據つて駝鳥を知つてゐたと同様に、既に周代の古から Giraffe をも知つてゐたであらう」と言つてゐる。<sup>(6)</sup>

なほ、O. MÜNSTERBERG 氏は畫象石中の騎射の圖に Giraffe の存することを主張せられたが、これは LAUFER 氏も指摘されたやうに遽かに Giraffe とは定め難いと信ずるから、私はこゝにはたゞその斷定に疑ひを挾む餘地あることを述べて置くにとゞめる。

以上の諸説は、私がこゝに考究を試みようとする上代文獻に現はれた麒麟に限られてはゐないけれども、皆麒麟が Giraffe である事を主張する説である。

次に、第二の方の説には如何なるものがあるかといふと、上に述べた BRETSCHNEIDER 氏の説や LAUFER 氏が Giraffe in Chinese Record and Art に於いて考察したやうに、東西交通の結果後世支那に生きた Giraffe が齎されたことは明白なる事實であつても、それを以つて古文獻上の麒麟をも亦た Giraffe であると逆推して斷じ去ることは不可能である。こゝに於いて麒麟の由來を Giraffe 以外に求める説も當然現はれる筈で、かの KINGSMILL 氏が動物であつて、然も人間の要素を多分に含む點を對比して、麒麟は印度の神鳥 Garuda と同一視すべきを主張したのは、<sup>(7)</sup> 所説そのものは首肯に値しないが此の種の見解の一例として注意される。併し、この種の説の内々尊重すべきは LAUFER 氏の高説で、氏は「二三の支那學者の説とは異つて Giraffe が上代支那人には知られてゐ

たといふ誤つた結論は、十五世紀明朝の治下にこの動物が支那に齎された際、古代神話上の空想的動物の記憶及びその詩的回顧によつて Giraffe が麒麟と稱せられたことに因るので、麒麟の古の原義が歴史時代に Africa に限られてゐた Giraffe でない事は無論である。實際麒麟の記事もその繪畫も共に何等 Giraffe と相似點は認められないのである——中略——Giraffe を見る者は、誰しもその丈の高さ、非常に長い首、前肢と後肢との割合などを特徴ある形態とすべきであるのに支那の麒麟にはこれに當たるべき何物もない。又た、古記録には時に麒麟の聲のことが叙してあるが、動物學の教へるところに據れば聲を出さないのが Giraffe の特徴である」と論じて古文獻上の麒麟は Giraffe でなくことを明瞭にせられた。たゞ LAUFER 氏はその著書の對象が Giraffe の考察であつた爲、古文獻上の麒麟が何であるか、或はその由來が何にあるかに就いては説明せられなかつたが、その點は甚だ遺憾に思はれる。後に詳記する如く、私は上代文獻に就き麒麟の考究を試みた結果、この LAUFER 氏の主張には全然賛意を表するに吝ならぬ者であるが、上代文獻に現はれる麒麟についてにはなほ究明を要し、それが何であるか、或はその由來如何といふ點について考察を試みて置くのは徒爲ではないと信ずるから、以下その問題に對して鄙見の開陳を試みるのである。

## 二、仁獸、瑞獸としての麒麟

先づ、古文獻に麒麟に就いての記述が如何様に現はれてゐるかを見ると、詩經國風には「麟之趾振振公子、于嗟麟兮、麟之定、振振公姓、于嗟麟兮、麟之角、振振公族、于嗟麟兮」とあつてこれは正義の注にも示されたやうに公子、公姓、公族の信厚なるを言つたものであり、麟が普通の動物でないと考へられてゐただけは推察し得るが、これだけの記述のみでは麟の性質が如何に考へられてゐたかといふことは明言し難い。然るに、説文には「麒麟仁獸也」と明記されて居り、易林には「鳳凰在左麒麟處右仁聖相遇」といふことがあるし、說苑辨物篇の「麒麟（中略）含仁懷義」や博雅の釋獸にこれと等しい記述の存するなど、皆麒麟なるものが仁獸と考へられてゐたことを示す史料である。

かくの如く、麒麟は一方に仁獸とされてゐると共に、瑞獸とも考へられてゐたことが多くの文獻上の記述から知られる。かの春秋の哀公十四年の條の「春西狩獲麟」は、津田博士が嘗て論及せられたところ<sup>①</sup>に従へば、麟を瑞獸とする漢代の思想の現はれであることとなるから、これが聖王の世に現はれる瑞獸とされてゐたと見て差支えあるまい。この麒麟を瑞獸とする思想は、他の文獻にも多く現はれるところで、淮南子覽冥訓の「昔者黃帝治天下而力牧太山稽輔之……鳳凰翔於庭、麒麟游於郊」や、新書雜事篇の「昔者禹及立爲天子、天下化之、蠻夷率服、北發渠搜南撫交趾莫不慕義、麟鳳在郊」や、或は論衡講瑞篇の「或曰鳳皇麒麟太平之瑞也太平之際見來至也」や、白虎通封禪篇

の「天下太平符瑞所以來至者、以爲王者承統理、調和陰陽、陰陽和萬物序、休氣充塞、故符瑞竝臻、皆應德而至……則鳳凰翔、鸞鳥舞、麒麟臻」などは、皆麒麟を瑞獸としたことに由來があらう。なほ、緯書のうちにこの思想の豊かに現はれて來ることは言ふまでもないが、念の爲め一二の例を舉げれば、孝經援神契には「德至鳥獸則鳳凰來鸞鳥舞麒麟臻」とあり、尙書中候には「河龍出圖洛龜書威赤文綠字以援軒轅麒麟在囿鸞鳥來儀」などある。これら以外にも史書の至るところに散見する記載、詳しく云へば、後漢書明帝本紀永平十一年、安帝本紀延光三年七月、八月、同四年正月などの麒麟の見はれた記事、三國志吳志孫權傳の赤烏元年八月、晉書の武帝泰始元年十二月、同二年、咸寧五年二月、太康元年四月、後趙後涼南涼寺の載記にある麟、麒麟もしくは白麟蒼麟の記事、かゝる諸説を取纏めた宋書符瑞志の精細な記載など、凡て麒麟を瑞獸とした祥瑞思想の現はれであることはこゝにとりたてゝいふまでもないであらう。

更に、文獻の上に往々次のやうな記述を見る。則ち、荀子、哀公篇の「古之王者好生惡殺、故麟遊其郊野」や、呂氏春秋有始覽名類篇のうちの「刳獸食胎、則麒麟不來」の外、淮南子本經訓、大載禮の易本命などにも同様の意味のことがあるが、これらも亦た麒麟が仁獸とされ、瑞獸とされた思想から後世展開したものと想像される。而して、それが極まつては說苑辨物篇にある「音中律呂行步中規、折旋中矩、擇土而踐、位平然後處、不群居不旅行、紛兮其有質文也、幽閑則循々如也、

動則有容儀」といふ極端な屬性までも附與されるに至つたのであらう。上に述べたところによつて、瑞獸とされるのが麒麟の最も著しい性質なる事概ね明瞭になつたと信ずる。

### 三、麒麟の形態

かく麒麟の仁獸及び瑞獸としての、換言すれば、靈獸としての性質上の著明な特徴を考へて來ても麒麟とは何であるか、或はそれが如何なる由來のものであるか、といふ問題は解決の端緒と思はれるものすら得られないやうに考へられるから、茲に轉じて一應その形態上の特徴に關する文獻の記載を辿つて更に考究を進めてみる。

形態について最初に思ひ當るのは、爾雅の釋獸にある「麕身牛尾一角」であつて、これは體が麕のやうな一角獸とするのである。麕の字については、既に孔穎達が左傳哀公十四年のかの獲麟の條の注に爾雅のこの文を引いてゐ、これに據つて麟と麕は唐代にあつては同義に用ゐられてゐたことが知られるが、それは恐らく古からさうであつたものと推察して大過ないと思ふ。說文の麒の條には「麒麟仁獸麕身牛尾一角」とあり、春秋感精符などには「麒麟一角者明海內共一主也」とある。又た、史記の封禪書には「其明年(徐廣はこれに「武帝立已十九歲」と注してゐる。)郊雍獲一角獸、若麟然、有司曰、陛下肅祗郊祀上帝、報享錫一角獸、蓋麟云、於是、以薦五時、時加一牛、以燎錫

諸侯、白金風符應於天也」とあり、漢書郊祀志にもこれと同一の文がある。然るに、漢書の方では既に王先謙氏も注意した如く麟が庶に作られてゐ、武帝の元狩元年の事になつてゐるが、麟を一角獸とする思想は前の諸例と變るところがない。なほ、漢書の終軍傳には「武帝異其文、拜軍爲謁者給事中從上幸雍、祠五時、獲白麟一角而五蹄」とあつて一角なることに言及してゐる。

後世の記録で古文獻を傳承しつゝ、然も麟の屬性を豊かに記述してゐるのは、爾雅翼であるから聊か煩瑣ではあるが念のためにそれを記せば「麟麋麋身牛尾一角、春秋之書麟亦曰有麋而角者耳、蓋古之所謂麋者止於此、是以其物可得而有其性能避患不妄食集、故其游於郊藪也、則以爲萬物得其性太平之驗、是不亦簡易而自然乎、至其後世論麋者、始曰馬足黃色圓蹄五角、角端有肉、有翼能飛含仁懷義、音中律呂行步周旋中規、折旋中矩游必擇土翔必後處、不履生蟲不折生草、不羣居不旅行不犯陷阱、不罹罟網、牡鳴曰游聖、牝鳴曰歸和、夏鳴曰扶幼、秋鳴曰養綏」とある。

上來麒麟も同一のものと假定して、その形態に關する記述を擧げたが、次に試みにその名稱を顧みると、麟といひ、麒麟といひ、極めて稀に麒麟とも稱せられてゐるが、かゝる名稱の方から何かその解釋に暗示を得られるやうなことは無いが、これから敢てその方面の考究を試みる。前にも引用した如く、詩經のうちには「麟之趾」「麟之定」「麟之角」と「麟」と稱せられてゐ、禮記の禮運にも亦た「麟以爲畜故獸不狘」とあり、爾雅の釋獸には前述の「麋」があるし、左傳にも「獲麟」とあ

つて古文獻には概ね麟もしくは麋の稱が用ゐられてゐる。なほ、こゝに麟といふ用例の重なるものを列記してみれば「麟以之游」(淮南子原道訓)、「鸞舉麟振鳳飛龍騰」(同兵略訓)、「歲星散爲麟」(春秋保乾圖)、「蒼之滅也麟不榮」(春秋演孔圖)、「麟鬪則日無光」(同上)、「麟毫爲籛」(洞冥記、卷二)、「麟鳳所遊安樂無憂」(焦氏易林卷一)などがある。かく麟なる名稱は極めて多く用ゐられてゐるが稀に「麒麟」の名稱が用ゐられて居り、説文にそれがあり、「麒麟麒麟仁獸也」といひ、麋の條には「牝麒麟也」とある。これに據ると自然麒麟は牡、麟は牝を稱したことが知られ、後世概ね此の説を採り、獸經には明かに「麒麟牡牝」と記されてゐる。かくて麒麟といふ名稱はその兩者が併稱されて現はれたものと信ぜられ前に引いた大戴禮や、説苑や、呂氏春秋有始覽名類篇の麒麟の稱、尚書中候や、孝經援神契や、春秋感精符など緯書のその稱、或は春秋繁露王道篇、五行順逆篇などのそれ、その他淮南子論衡、吳越春秋、述異記、博物志などに現はれる著明なものを始め此の名稱は全く枚舉に違ないばかりである。而して、明確に論定することは至難であるが、上の「麒麟牡牝」といふ事は果して古から信ぜられた説であらうか。麒麟が牡、麋が牝なることが古來信ぜられてゐたならば、何故古文獻には通稱として麟即ち麋が多く用ゐられてゐるのであらう。此の問題は中々容易に解決し難く、然も上に掲げたやうに古文獻には麟が一般で、恐らくその點から推してそれが古い名稱であつたらうと想像せられ、最初は何等性別などを附することなく通稱として用ゐられてゐたのであらう。

なほ、往々白麟といふものが記されてゐ、例へば宋書符瑞志中に纏められてゐる歴史的の所傳を見ても、漢武帝の元狩元年十月、太始二年二月、吳孫權の赤烏元年八月、晉武帝咸寧五年二月、太康元年四月などに白麟の現はれた事が記されてゐ、漢武内傳西王母至る所などにも「乘白麟」とあるが、これは恐らく白雉、白鳥、白虎、白狐などいふと同じく、黒色に反して明るい感のある白を擧げて、後世その陽なる性質を一層強く表示しようとしたもので、晉書の後趙載記に蒼麟十六云々とある「蒼」も亦た東方の陽色なる蒼色を以つて麟の陽性を強く現はしたに過ぎないのであらう。

#### 四、麒麟の由來に關する諸説の批判

上來聊か説明を試みたやうに、麒麟は仁獸瑞獸として、或は音は律呂に中り、行歩規矩に中るといひ、或は生草を折らず、生蟲を履まずといひ、その性質溫良なるをいふ一方に、麒麟の形態については文獻上種々異説もあるが、結局一角獸なることには一致してゐると云つて大過あるまい。

かく考へて來て、然らば麒麟は如何なる由來のものであるか、果して實在の動物の或る一面が思想上發達して靈獸とまでなつたものであらうか、或は何等かの欲求に由來する全く想像上の動物であらうか、更に或は西方からの影響によつて生じたものであらうか。

こゝに於いてか、先づ一應検討を試みる必要のあるのは Giraffe を麒麟とする説である。云ふま

でもなく、後世の記録、例へば瀛涯勝覽に「阿丹國麒麟、前足九尺餘後足六尺餘、頂長頭昂至一丈六尺、傍耳生二短肉角、牛尾鹿身、食粟豆栗餅餌」とあるの類は明かに Giraffe を以つて麒麟と稱してゐるが、かく後世 Giraffe を麒麟と稱してゐるからと云つて、上代文獻上の麒麟も亦た Giraffe であるといふ推斷は今の場合不可能で、それは此の靈獸の性質形態などの記述をよく考へて見て、それが Giraffe と比定し得る場合にのみ許容される結論である。而して、Giraffe の極めて溫和な性質が靈獸たる麒麟の一面である生草を折らないとか、生蟲を踐まないとかいふのと近い關係にあるやうにも思はれるが他の點が一致し難いならば、それは別の起源のものがかく説かれるに至つたものと考へる外ない。私は此の問題に就いては、最初に言及して置いた LAUFER 氏の「實際麒麟の記事も繪畫も何等 Giraffe に似たところはなし」との言についで「Giraffe は、その丈の高さ、非常に長い首、前肢と後肢との割合などその特徴ある形態が、不注意に觀た者にも印象づけられるのは明白な事實であるが、支那の文獻に現はれる麒麟及びその特性は全然かゝる Giraffe の特徴とは一致しない」と述べられた着眼に全然賛意を表する者である。LAUFER 氏がその著書の中に明瞭に指示して居られる通り、埃及、亞刺比亞、波斯を初め歴史の各時代を通じて Giraffe は繪畫は元より文獻の上に記される場合を検討すると、殆んど凡て首の長いこと、前肢と後肢との割合などが注意されてゐ、又たそれは Giraffe を觀察して當然想起せらるべき點であるのに、前に掲げた諸例を

見ても直ちに知られるやうに、上代の支那文獻にはそれらの點を麒麟の特相として記したものは皆無であり、一應 Giraffe の肉角の事を考慮に置いて見ても麒麟の一角といふ事——この事に就いては後に言及する——には全然該當しないから、上代文獻上の麒麟を以つて Giraffe に當てることは到底不可能であらうと思ふ。なほ H. KOPPEL 氏及び章鴻釗氏の説のやうに、麒麟と Giraffe の亞刺比亞名なる Zurafa などの語とを比較して同一語といひ、もしくは音の近似を説いて兩者の間に密接な關係ありといふのは恐らく兩者を同一視しようといふ意向に基く附會の説であると信ずる。

又たその名稱は兎も角として、Giraffe が現地質世代に於いては Africa に限られてゐるが前地史世代にあつては、より廣い範圍に分布し歐亞の各地、特に希臘、波斯、印度、支那に棲息してゐたといふ推定を根據として、古代支那人も何等かの傳承からこの動物を聞知してゐ、それが實見されないものであつた爲一層神秘的に想像せられて靈獸とまでなつたのではあるまいかといふ推考も至極尤もな考へと思はれる。併し、これも現今 Giraffe の棲息地が Africa に限られてゐても、古文獻の記載が兩者合致するところ多いならば許容し得るであらうけれ共、殆ど兩者の間に一致點が無いのに、然もなほ前地史世代に棲息してゐたとの故のみを以つて推斷することは同意出來ない。元より前地史世代の生物が、現世代に於いても或は説話的に傳承せられ或は繪畫として表現せられて歴史的記述に現はれる場合の存するのは強ち無理ならぬことではあるが、そのやうな場合には今少

しはその間の階程を明かにし得るであらうし、今一歩譲つて Giraffe と上代文獻上の麒麟との形態の上に於ける一致點が有るか無いかといふ問題は暫くこれを措くとしても、Giraffe が比較的廣大な分布の範圍を有した時代から現今の如く極めて狭小な分布地域となるに至つた次第が地理上歴史上相當明かに解かれない限りは、直ちにこの所論に同意し難いのである。かくて、これらの諸點からも上に述べた上代文獻上の麒麟を以つて、Giraffe に當てるのはかなり困難であらうといふ鄙見は一層確められると云つてよからう。

なほ、麒麟は一角獸であるといふ事がある特徴の一であるから、これを實在の動物中で一角なるものと比較して念の爲點檢を試みると、實在の動物中一角獸として著明なものは Rhinoceros であるが、此の動物は概して智力に乏しく、鈍重で非常な力を有し、本來の性質は臆病なのであるが一度傷つき、或は又た危險を感じると獍猛となつて、他に危害を加へるものであつて、唯一角なる點と特に Javan Rhinoceros (Rhinoceros Sondaicus) の尾が牛尾に似てゐるといふ點以外には上代文獻上に現はれる麒麟とこの動物とは一致するところが無いし、Rhinoceros は犀といふ名稱で上代支那人に知られてゐた動物であるから、一角なる故のみを以つて靈獸であり溫和なことがその特徴である麒麟と Rhinoceros とを關係づけることは不可能である。

更に考究を試みる必要のあるのは Unicorn 希臘の所謂 μονόκερως (Monokeros) 即ち一角獸であ



る。この *μυροκερος* に就いては、幸にも E. B. SCHRAEDER 氏が *Die Vorstellung von μυροκερος und ihr Ursprung* <sup>(81)</sup> なる、かなり精細な研究を公にしてゐる、殊に *Perepolis* のものを始め藝術品に表現された諸例を示して説明された點が注目されるが、これが實在の動物でなく空想的のものであることは明白で、*KLEIN* の記録に「印度方面からの影響に依つて現はれた野驢で、首は赤く體は白く、然も額上に一角を有し、その角は上の方が赤、中が黒、下の方は白になつてゐる」と記されてゐて全く想像的な動物である。その他 *ARISTOTLE* が *Oryx* と稱する *Antelope* (羚羊) の一種と、印度驢との共に一角なる二種類の動物を示したことを紹介し、*STRABO* は鹿のやうな頭の一角獣が印度に存すると述べたことを引いてゐる。これらの記述に依ると一角なる事は勿論、大體體の大きさの表現といひ、體が白いと云つてある事といひ、又た鹿に似た頭といひ、かなり麒麟に近い點も認められるのである。かくて、麒麟の由來はこの不可思議な動物が、何等かの機會に漸次東方に影響を及ぼした結果生じたものではあるまいかと考慮せられるのみならず、その起源を多少共印度に求めて説くところに一層疑念を深くするのであつて、影響關係の論斷には相當確實な證據、もしくは或る程度迄その間の階程を説明し得ることが必須の條件であるといふ、私平常の主張を今の場合に當て嵌め難いとしても、なほ、考慮に價するかと考へたのであるけれ共、翻つて熟慮するに、私の寡聞淺見の爲ではあらうが西方諸國及び印度の説話に於いては一角獣なるものは餘り重要な位置を占める

ものではないと信ずる。元來かゝるものが遙か東方に波及し、然もその土地の思想に影響を及ぼすには本の土地にあつて非常に著明なものであるか、然らざれば原地に於けるそのものゝ性質が影響を受けた方の土地の人々の心に多くの接觸點を持ち、或は感銘せしめる點ある場合にのみ傳播する筈であるの言ふまでもない事であるのに、一角獣の説話はさまで著明なものでない上に、性質の上でもさまで支那の人々の心に接觸點を持ち或は感銘を與へるやうなところも無いやうに思はれるのみならず *SCHRAEDER* 氏の記述を見て、私はその一角は凡て力を象徴したものと信ぜられるので、力強いものであるが故に時に靈獸とされるに至る場合の存する事は、無論、思想上許されるけれ共力強い動物が仁獸とされ瑞獸とされる事は殆んど全くあり得ない事と云つてもよからう。かく考へて私は *Unicorn*, *Monokeros* を麒麟の *prototype* とする説は到底成り立ち難いと信ずるに至つたのである。

以上私は麒麟はその起源を *Giraffe* と *Rhinoceros* と *Monokeros* とを異にするものなるを論じ來つたが石索にある漢麒麟碑同山陽麟鳳碑 <sup>(82)</sup> (圖版第一參照) に存する圖樣や畫象石のうちにある麒麟と推察される圖樣(圖版第二參照) がそれらの動物とは全く相違すると思はれる事も、亦た、上述の推考の誤謬ならざるを傍證するものであらうと思ふ。



## 五、麒麟の由來に對する鄙見

以上麒麟の由來に就いての諸説はほぼ批判して、遽かに賛同し難い理由をそれ／＼述べ來つたから、最後にそれに對する鄙見を開陳して識者の是正を仰ぎたいと思ふ。こゝに於いて、その究明に採るべき残された方法は、文字の検討及びそれに附隨する考察と、遺物に推考を加へることゝであるが、もしこの兩方面からの考察が一致するならば、その見解は略ぼ當を得たものと云つてよからうか思ふ。

是に於いてか文字の検討を試みる爲に説文を繙くと麒麟（麟）とあつて麒も騊も共に麋に本づく文字で「其」も「吝」も音符であつて、文字の方面からは、麒麟は何等かの意味で鹿と關係があるのではないかいふ事を思はしめる。而して「麟大牡鹿也从鹿夨聲力珍切」とあるに於いて一層その感を強くする。又た、羅振玉氏の殷虛文字類編では夨（鹿）について夨（鹿）これは夨に从ひ「似鹿而角異」とあるからやはり鹿に關係がある。なほ、又た論衡講瑞篇には「春秋之麟如騊、宣帝之麟言如鹿、鹿與騊小大相倍體不同也」と云つて明かに麟と鹿とは關係あるものとしてゐる。更に、後世のものではあるが、舊唐書の五行志に「元和七年十一月、龍州武安川會田中嘉禾生、有麟食之、復麟之來一鹿引之群鹿隨之」とあつて、文字からの聯想によつてかゝる説話を生じたとするよりも、寧ろ古來の思想

がかゝる形で現はれたと見る方がよからうと思はれるから、これも麟と鹿と何等か關係あるものとされた例とするに足りるであらう。この見方にほぼ過誤無しと信ずる私は、更に進んで上代支那人の鹿に對する思想及びそのうちにそれが發達して果して麒麟のやうな靈獸となる素因を含んでゐるか否かに就いて考究を試みて見よう。

元より鹿に就いての記載は、古文獻にも多く現はれてゐることといふまでもないが、その一々に對しては別にこれを考究する機會があると信ずるから、こゝには鹿がたゞ麒麟の淵源に何等か關係を持つてゐるのではないかと思はれる諸例のみを考察するのである。先づ詩經の大雅にある「王在靈囿麋鹿攸伏、麋鹿濯々」が思ひ當るが、これが祥瑞思想の現はれであるとは遽かに斷定出來難いからこれは暫く措くとして、史記の封禪書には「天子苑有白鹿、以其皮爲幣、以發瑞應造白金焉」とある、この白鹿の皮を幣としたといふことはこれ亦た祥瑞思想であるか否か明瞭でないが、その後「其明年郊雍、獲一角獸若麟然、有司曰陛下肅祇郊祀上帝、執享錫一角獸蓋麟云、於是薦五時、時加一牛、以燎錫諸侯白金風、符應合於天也」とあるのは、明かに祥瑞思想であつて、これと共に説かれてゐる事から推察すると前のも同一の思想と見て大過ないと思ふ。又た前漢書郊祀志には鼎を迎へて甘泉に至るところの後に「至中山晏溫有黃雲焉、有鹿過上自射之、因之以祭云」などゝあつて鹿が瑞應とされたり、祭に關係した事のあるのを知り得る。なほ漢の五瑞國の中に白鹿と想はれる

ものゝ存するのこれに關連して注意される。加之白鹿を祥瑞とする思想は、後漢に關する文獻には盛に見受けるところで、著明な例を挙げれば後漢書章帝本紀建初七年癸丑十月西巡狩の條に「又獲白鹿」云々とあり、同じく「元和中白鹿見郡國」とあるし、安帝本紀の「延光三年六月辛未扶風言白鹿見雍、秋七月潁川上言木連理白鹿麒麟見陽翟」とある。この記述に於いて白鹿と麒麟とが全然同一に見られてゐるのは特に注意に價する。その他、白虎通の封禪の條には「天下太平符瑞所以來至者、以爲王者承統理調和陰陽、陰陽和萬物序、休氣充塞、故符瑞竝臻皆應德而至」といひ徳至鳥獸の中に白鹿の現はれたことがあるし、宋書符瑞志(中)「白鹿王者明惠及下則至」の條には、魏晉宋の各時代に涉つて祥瑞として白鹿の記事が多く現はされてゐる。これらの例に於ける白鹿の白は、白麟の場合と等しくその明るい性質を現はさうとしたものに過ぎないから、その根本は鹿を祥瑞と考へる思想であつて、上述のやうな記述の多くの存することから推すとその思想が相當有力であつたことが知られる。こゝに於いて、かゝる思想の由來如何といふことが問題となるが、それはなほ十分研究を試みた後でなければ明言は困難であるけれ共鹿は見た感じが他の動物に比して極めて高雅なことや支那古代の狩獵の對照のうちで鹿は重要な一つとして生活の資料ともなつたといふことが、この動物の崇拜される一つの原因であつたらうといふ事だけは言ひ得よう。

然るに鹿には以上のやうな一面があると共に、又た他面には極めて不可思議な動物に轉化したら

しくその事が山海經その他に現はれてゐる。即ち山海經南山經招搖之山の條に「有獸其狀如馬而白首其文如虎而赤尾、其音謠其名曰鹿蜀佩之宜子孫」とあり、これはその狀馬の如しであるが、鹿蜀といふ名が注意せられ、西山經には「臯塗之山有獸焉、其狀如鹿而白尾馬足人手而四角名曰猼訑」とあつて、これは形が鹿のやうな空想上の動物が想像されたものと思はれる。その他「西皇之山……其獸多麋鹿」とも「上申之山……獸多白鹿」ともあるし、東山經の「尸胡之山北望殫山」に「有獸焉其狀如麋而魚目名曰嫫胡」などや、中山經、穀梁之山の條に「有獸焉其狀如白鹿而四角名曰夫諸」なども鹿に關聯して不思議な形が想像されてゐる。

これらの諸例は、鹿が異常な動物となつた例の存することを示したものであるが、更に範圍を狭くして鹿と關係ある一角獸はないかといふと、爾雅の釋獸には「麋大麋牛尾一角」とあつて麋に甚だよく似てゐ、鹿から發達して牛尾一角の形とされるに至つたものは必ずしも麟に限らない事が知られる。

かくて、上に考察を試みた結果と藝術品に表現せられた麒麟とを對比して、果してその間に矛盾は起らぬであらうか。先づかの麒麟碑及び山陽麟鳳碑の具體的な形態を見ると、それは四足獸で一角があり、その體の形は鹿に似てゐるやうに思はれる。(圖版第一参照) 併し、これは馬に酷似してゐるとも考へられるが、極めて粗略な表現にあつては鹿と馬とは體形だけでは明瞭な區別は中々つき

難いので、私が特にこの圖様を鹿に近いものと斷ずるのには次の理由に據るのである。即ち、第一に漢代の圖様に於いては、良馬を現はすには屈撓あることが顯著なる特徴で、その詳細に就いては近く發表しようとしてゐる「天馬考」なる小考のうちに論ずるつもりであるが、馬に由來するならば靈獸とまでされたこの動物に屈撓のない筈はないといふこと、第二に所謂漢の五瑞圖の白鹿とせられるものと、この圖とが角と尾との相違を除いては大體相同じいこと及び、第三には鹿と馬とは蹄が全然相異なるがこの碑の圖様にあつては蹄が明かに割れてゐて鹿のそれと同一であるといふ三つの理由に據るのである。序に一言挾んで置きたいのは、麒麟碑などの麟と開母廟畫象にある一角の獸（圖版第二參照）とは同様のものと思はれるから、これ亦た麟を現はしたものと見て大過なからう。かくて上に推考を試みた説文その他から得た結果と、これらのものとはほぼ一致して矛盾しないやうに思はれる。

なほ、前に一角なることを麒麟の特徴の一つと考へて置いたが、一角は必ずしも麒麟に限らないので、現に爾雅釋獸に「驪如馬一角不角者騏」とあつて、馬にも一角が想像されてゐるし、又たこゝに山海經に現はれてゐる種々の不思議な一角獸が思ひ當るが、その二三を例示すると西山經章莪之山の條に「有獸焉其狀如赤豹五尾一角」とあるし、同じく中曲之山には「有獸焉其狀如馬而白身黑尾一角」とある。その他北山經敦頭之山にも「多騏馬牛尾而白身一角」とあり、秦嶽之山にも「有

獸焉其狀如羊一角」などゝあつて、一角なる動物が麟に限らず想像せられた事實が推知せられるのである。かくて麒麟を一角とする事も勿論實在の動物などに由來するものでなく、上代支那人が思想上考へて生じたものである事はほゞ疑ふ餘地がないと信ずる。

かく考察を試みて來ると、麒麟はその起源を鹿の崇拜に發しつゝ、それが思想上漸次靈獸たる屬性を附加して行くにつれ、終に實在の鹿とは異なるを要しその角が一角とされ、ついで靈獸としての屬性も結成するに至つたものであらう。そして現存する種々の古文獻が形を整へた頃には、既に麒麟はその起源を何れに繋ぐものであるか殆んど明かにし難いまでに發達してゐた事を考へると、これがその本源なる鹿と思想上分離したのは、それを何時の頃と今から推測することは不可能であるが、ずつと古のことであらうと想像される。そして現存の諸文獻が成立した頃には、最早麒麟としての屬性が發達してゐ、政治的な祥瑞思想とも結びついてゐて、その事が漢代になつてこの靈獸を益々發展せしめる誘因ともなり、支那思想上特に重要な靈獸の一ともされるに至つたのであらう。要するに支那の上代には種々の想像動物が存するのは著明な事實であるが、かゝる想像的動物の一起源は恐らく動物崇拜にあつたに相違ない。即ち人の想像力に依つて「*Yin*」として現はれてゐる麒麟の由來の一面が鹿の動物崇拜に存し、それに種々の分子が附加し、展開した事が未熟ながら以上の

考察によつて明かになつたと信ずる。

## 註

- (1) Berthold LAUFER, The Giraffe in History and Art. Chicago, 1928, p. 96, Note.
  - (2) BREISCHNEIDER, China Intercourse of Central and Western Asia in the 15th Cent. (The China Review, Vol. V. 1876, p. 172)
  - (3) H. KOPSIL, The Kilin identified with the Giraffe. (The China Review, Vol. VI. 1878, p. 277)
  - (4) DE GROOT, The Giraffe and the Kilin, (The China Review, Vol. VII. 1879, pp. 72—73.)
  - (5) 袁鴻釗, 三靈解第三麒麟解, 二十五枚裡二十六枚表
  - (6) A. FORKE, Mu Wang und die königen von Saba (Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen, Jahrgang VII. 1904, pp. 139—141.)
  - (7) O. MÜNSTERBERG, Chinesische Kunstgeschichte, zweiter Band, S. 65, Abb. 90.
  - (8) LAUFER, *op. cit.* p. 93
- 又 MÜNSTERBERG 氏の問題とした動物は單に鹿であると云つてゐる。想ふにこの動物の首は随分長いから或は Giraffe ではなくとも思はれるが、他に馬や鹿を現はしたもの、(例へば開母廟闕壽家のうち)にも可成り長い首が有つて、これは表現の拙劣なところからのことであらう。
- (9) LAUFER, *op. cit.* Chap. 5, pp. 41—54.
  - (10) The China Review, Vol. VIII, p. 137.
  - (11) LAUFER, *op. cit.* pp. 41—42.

(12) 魏 張揖、博雅、卷十釋獸「麒麟類類角含仁懷義(下略)」

(13) 津田博士、儒教成立史の一側面(第一回)——史學雜誌、第三十六編第六號四三〇頁——四三二頁。

左傳の哀公十四年春西狩於大野叔孫氏之車子鉏商獲麟、以爲不祥以賜處人、仲尼觀之曰麟也然後取之といふのは如何に解すべきか、必ずしも明確でないが、春秋の獲麟が津田博士の説かれたやうに祥瑞思想の表はれとして、王者を未來に待つためのものか王ならぬ王が當時あつたとするか何れにせよ漢代の思想とすれば、聊か詮索に過ぎる観はあるが、左傳のこの記載は春秋の混亂永きに涉つて聖王の現はれない爲、麟も久しく現はれず、それが現はれても世人はその何であるかを知らず、仁聖の王者にも比すべき仲尼にして始めてその瑞獸なる事が知られたといふ說話ではあるまいか。麟に關係ある問題であるから試みにこゝに附記して置く。

(14) 後漢書 卷二 明帝本紀、永平十一年——麒麟白雉醴泉嘉禾所在出焉。

(15) 同上卷五、安帝本紀延光三年七月潁川上言木連理白鹿麒麟見陽翟。同八月潁川上言麒麟白虎見陽翟。同四年春正月壬午東郡言黃龍二麒麟一見漢陽。

(16) 吳志 卷二 孫權傳赤烏元年八月武昌言麒麟見。晉書 卷三 泰始元年十二月是月鳳皇六青龍三白龍二麒麟各一見于郡國 二年鳳凰六青龍十黃龍九麒麟各一見于郡國。咸寧五年二月甲午白麟見平原、九月甲午麟見河南。太康元年四月白麟見頓丘。

晉書 卷百六 載記六後趙郡國前後送蒼麟十六白鹿七 卷百二十二 載記二十二後涼麟見金澤縣。卷百二十六、載記二十六 利鹿孤立二年龍見於長寧麒麟游於綏羌。

(17) 前漢書 卷二十五 郊祀志郊雍一角獸若麟然 師古曰鹿鹿屬也 形似牛尾一角 有司曰陛下肅祇郊祀上帝報享錫一角獸蓋麟云於是以薦五時時加一半以燎賜諸侯白金以風符應合於天地。

(18) 前漢書 卷六十四下。

(19) 大戴禮 卷十三 易本命 有毛之蟲三百六十而麒麟爲之長。說苑 卷十八 辨物篇、凡六經帝王之所著莫不致四靈焉 德盛則以爲畜治平時氣至矣故麒麟屬身牛尾圓頂一角含仁懷義(下略)。呂氏春秋 卷十三 有始覽名類篇、凡帝王者之將興也天必先見祥……禍福之所自來衆人以爲命安知其所……刳獸食胎則麒麟不來。

- (20) 尙書中侯 河龍出圖洛龜書咸赤文綠字以授軒轅麒麟在囿鸛鳥來儀 孝經授神契 德至鳥歌鳳凰來鸛鳥舞麒麟臻(下略)  
春秋感精符 王者德旁流四表則麒麟至。  
(21) 春秋繁露 卷四、王道、麒麟遊於郊。卷十三五行順逆、恩及於毛蟲則走獸大爲麒麟至。  
(22) 淮南子 第三 天文訓 麒麟圖而日月食。第四墜形訓 應龍生建馬麒麟生庶獸等。  
論衡 卷五 異虛篇 麒麟野獸也桑穀野草也。  
卷十一 說日篇 仰視天之運不若麒麟 吳越春秋。卷四 越王無余外傳 麒麟步於庭。述異記上 丹陽大姑陸陰下有  
石麟二枚不知年代傳曰秦漢間公卿墓則以石麒麟鎮之。  
博物志 卷一 物產 神宮在高石沼中有神人多麒麟琪芝神草。卷四 物理 麒麟圖而日蝕。  
(23) 註(16)參照。  
(24) LAUFER, *op. cit.* pp. 41—42.  
(25) 註(23)(24)參照。  
(26) LAUFER, *op. cit.* p. 3  
(27) The Encyclopedia Britannica (13ed.) Vol. 23—24. pp. 233—245.  
(28) Sitzungsberichte der königlich preussischen Akademie der Wissenschaft (zweiter Band) S. 573—581.  
(29) 石索、四。  
(30) 說文解字註 十編上。  
(31) 羅振玉、殷虛文字類編 第十、三枚。  
(32) 岩井大慧學士は、鹿が生活のミツテルとして重要であつた爲崇められることになるのは明かであるとして、遼史太宗紀  
三年四月戊寅東巡、已卯祭鹿神や、別に遼俗好射鹿、每出獵必祭其神以祈多獲とある其神は鹿鹿神であるとの例を  
これは近い代の史料であるが、ブリミティブな狩獵民族の鹿を神として崇拜する例として古代も大した相違はなかつ  
たらうと附言して私に寄與せられた。茲に懇切な助言を特記して感謝の意を表する。

附言。(一) 村田治郎氏は亞東七、八兩月の誌上に「麒麟考」なるものを執筆して居られる。主としてラッセル氏著書の紹介  
であると記されてゐるが、支那の史料をも豊富に示されてゐる。九月號には結論を出されることゝ期待し、それを  
一讀した上で本稿を公にしたいと思つたが、同誌上に休載されたからその結論を拜見し得なかつたのを遺憾に思ふ。  
(二) 津田博士は麒麟が先づ瑞獸とせられ、ついで瑞獸は仁君の代に現れるものなることから思想上麒麟が仁獸  
となり、又た仁君は殺伐を惡み生成を好むといふことから轉じて、呂氏春秋などの「割獸食胎則麒麟不來」といふや  
うな思想に展開したのであらうと教示せられ、私はこの卓説を敬承しその然るを信ずるに至つたが、こゝには思ふと  
ころあつて、敢て私の最初に考へた未熟なまゝの形として置く。  
(昭和四年十月二十八日稿)